

令和 2 年 2 月 25 日

教 育 長 様

		代表者 校園名 : 大阪市立本田小学校	校印
		校園長名 : 錢本 三千宏	
研究コース		電話 : 06-6581-1531 F A X : 06-6581-3194	
グループ研究B		事務職員名 : 喜連 尋滋	
選定番号	216	申請者 校園名 : 大阪市立本田小学校	
校園コード(代表者校園の市費コード)		職名・名前 : 首席・流田 賢一	
561155		電話 : 06-6581-1531 F A X : 06-6581-3194	

平成31年度 「がんばる先生支援」研究支援 報告書

◇平成31年度「がんばる先生支援」研究支援について、次のとおり報告します。

1	研究コース	コース名	グループ研究B	研究年数	継続研究(3年目)
2	研究テーマ		資質・能力を育成する国語科授業のあり方 —パフォーマンス評価を活用して—		
3	研究目的	<ul style="list-style-type: none"> ○ 新学習指導要領でめざす見方・考え方を働かせた学びができる児童の育成 ○ 学期に複数教材の提案(カリキュラム・マネジメント)と学習評価の充実 ○ 学びを積み重ね、児童に確かな力をつけるための系統指導表(読むこと)の作成 ○ パフォーマンス課題で学びを活用する「読む×〇〇」の言語活動の単元構成検討 ○ 資質・能力を育成し、汎用的能力が身についた児童の育成 ○ 教科の本質をとらえた授業づくり研究会を定期的に開催 ○ 先進的研究校から講師を招聘し、公開授業・講演会を企画・運営し、大阪市全体へ拡大 			
4	取り組んだ研究内容		<p>年間を通して、新学習指導要領を読み合わせながら①令和2年度版教科書に準拠した複数教材の系統表、②用語集、③実践事例を作成してきた。この成果を大阪市北部・中部・南部で開催した公開授業研究会で実践提案し、研究報告を重ねてきた。…[資料①]</p> <p>1) <u>学び</u> 成果物として、上記の①②③を作成する研修会を実施:[25回] 令和2年度版教科書を読み、指導の系統を明らかにし系統表を作成 新学習指導要領で必要な力を明らかにし、資質・能力を育成する指導のあり方を検討 1学期に9回、2学期に11回、3学期に5回：グループメンバーに加え他校の先生も参加</p> <p>2) <u>検討</u> 提案内容を整理し、公開授業前の指導案検討会の実施:[7回] 11月13日公開(4本の提案授業)3回、1月17日公開(2本の提案授業)2回、 1月29日公開(1本の提案授業)2回:3回の公開で研究報告のプレゼンテーションを実施</p> <p>3) <u>学び</u> 研究テーマを深め、指導技術向上のために先進的研究校へ派遣 7月に2名(第25回国語授業づくりセミナー)、8月に3名(第21回国語授業研究会) 8月に1名(東京学芸大学公開講座)、8月に1名(考える国語セミナー2019Summer)他</p> <p>4) <u>公開</u> 研究内容を大阪市に広げる提案授業、師範授業、研究報告、講演会の実施:[3回] 大阪市北部・中部・南部で開催し、大阪市のみならず各地からのべ270名超参加 読むこと×〇〇の実践例を配布、毎回研究報告をプレゼンテーション 3回目の公開で、研究内容を冊子にまとめて参加者に配布(追加で希望者には郵送配布) 11月13日本田小学校(中部)、1月17日南百済小学校(南部)、1月29日豊新小学校(北部)</p> <p>5) <u>学び</u> 大学教員・先進的研究校の講師と複数教材、実践事例を検討する研修の実施:[2回] 1月28日 大学教員から指導、2月3日 先進的研究校教員から指導</p> <p>6) <u>振返</u> 研究のまとめに向けて、アンケート集計、振り返り、報告書作成の会議を実施:[4回] 各公開授業研究会後に1回ずつ、2月6日に研究の振り返りを実施</p> <p>※ <u>学び</u>(グループ内、管外出張、講師と共に)を基盤に、<u>公開</u>をし、研究を<u>振返</u>ことができた。</p>		

		<p>【児童アンケートから、国語の学習で身についた力を自己認識できたかを検証】…[資料②] 児童アンケート項目「国語の学習で自分に力がついた」で肯定的割合が100%であった。全員が「国語の学習で身についた力は何か」で具体的に記述できた。例えば「パフォーマンス課題のリーフレットを作成することで要約力がついた」等のメタ認知ができたと言える。これらの付けたい力を系統的に指導し、児童の力とするために用語集としてまとめて整理した。</p> <p>【児童アンケートから、学びを活用し、社会で役立て POSSIBILITY ことができるかを検証】…[資料③④] 児童アンケート項目「国語で学んだことは社会で役立つ」で肯定的割合が100%であった。全員が「日常生活のどんな場で役立つか」に記述でき、「具体例を挙げながら相手を説得する方法」等があった。真正的な学びとして新聞社に投書を行い、実際に採用される者もいた。実生活の課題から学びに必要なことを実感を持ちながら学習することができた。それに加え、国語科の学びは社会科等の他教科にも生かすことができる実感を児童も指導者も持つことができた。</p> <p>【国語の経年調査「活用」に関する項目を検証】 国語科経年調査の校内と市平均正答率の差を今年度と昨年度で比較した。合計は今年度+4.2(昨年度+2.6)と向上した。基礎と活用についても同様に比較すると、基礎+4.3(+3.8)、活用+4.8(-3)と共に向上した。特に、活用問題では昨年度から+7.8と大きな成果があったのは、系統を意識した指導、フレ教材を活用した確かな力の育成、観点を持たせ焦点化した指導が要因であると分析した。</p> <p>【参加者アンケート項目「系統指導」について検証】…[資料⑤⑥] 参加者アンケート項目「系統指導は大切」の肯定的割合は100%となった。「系統指導をしている」を初回参加と複数回参加での肯定的割合のクロス集計結果は、1回目の公開:複数回参加100%(初回参加:62%)→2回目の公開100%(46%)→3回目の公開100%(22%)となった。複数回参加者は、系統指導を実践する割合が100%と高く、研究内容が理解され広がっていると言えるだろう。「系統表の冊子は役立つ」の肯定的割合は100%であり、追加での冊子希望者も多く、他市から複数の問い合わせがあり郵送で対応したほど好評であった。</p> <p>【参加者アンケート項目「複数教材」について検証】…[資料⑦] 参加者アンケート項目「複数教材の指導は有効」の肯定的割合は100%となった。「複数教材の指導を実践」を初回参加と複数回参加での肯定的割合のクロス集計結果は、1回目の公開:複数回参加70%(初回参加:37%)→2回目の公開83%(15%)→3回目の公開88%(11%)となった。複数回参加者は、複数教材を活用した指導の割合が高くなってきており、研究内容が理解され広がっていると言えるだろう。また、「複数教材の冊子は役立つ」の肯定的割合は100%であった。実践事例集も複数教材の活用方法がわかると好評であった。</p> <p>【公開授業参加者の満足度、参加者数について検証】…[資料⑧] 参加者アンケート項目「研究会に満足」の肯定的割合は100%であった。参加者数は目標を大幅に超え270名以上となった。大阪市内の北部・中部・南部で開催したので本研修へ初めて参加する近隣の教員が多くいた。大阪市内はもちろん、北は石川県、東は静岡県、西は長崎県から広く参加があった。3回の研究会にテーマを設けたことにより、参加者の目的意識に合い、「今後の指導に生かせそうだ」と好評であった。「冊子を参考に校内研究に活用した」と他校の校長先生から連絡があった。完全実施目前の新学習指導要領についても「読んでいなかったが、今日の研修で実践の方向性がわかった」と様々なニーズに合い、必要感を満たす研修となった。</p>												
5	成果・課題	<p>◆まとめ◆</p> <p>3年間のまとめとして、2年間の成果と課題を受けて研究を進めてきた。成果をまとめると、</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 令和2年度版教科書準拠の複数教材系統表(物語文・説明文)の作成・配付→好評であった 2) 系統を意識した用語集(物語文・説明文)の作成・配付→好評であった 3) 複数教材と中心教材を活用した実践事例集(物語文・説明文)の作成・配付→好評であった 4) 公開授業研究会で公開授業と授業づくり研修ができる場を3回設定、参加者合計270名超 5) 研究内容である系統を意識した指導、複数教材を意識した指導が研究会参加者に拡大 6) 様々な場で研究内容を発信…[資料⑨⑩] <p>教員の指導力向上に向けては、上記の6つのことから、理論を学び実践に生かすことができたと言える。メンバーに加え、参加者にも研究内容の実践が拡大していることが分かった。さらに、児童の学力向上にもつながる研究だと経年調査の結果からも明らかになった。多くの先生方とつながり、学ぶことができた3年間であった。</p> <p>◆課題◆</p> <p>研究テーマに沿って3年間研究を進めてきた中で見えてきた課題は、新学習指導要領で求められている指導と評価、児童に力を定着させるための方法についてである。以下に整理する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 真正の学びとなる課題を設定することは難しく、今度も研究が必要 2) ループリック等を活用した多様な評価方法の研究継続 3) 資質・能力育成の効果を發揮するには、学校全体で系統を意識した指導に取り組む必要有 												
6	研究発表等の日程・場所・参加者数	<table border="1"> <thead> <tr> <th>日程</th><th>令和元年11月13日</th><th>参加者数</th><th>約100名</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>場所</td><td colspan="3">大阪市立本田小学校</td></tr> <tr> <td>備考</td><td colspan="3">日程:令和2年1月17日、参加者数:約85名、場所:大阪市立南百済小学校 日程:令和2年1月29日、参加者数:約90名、場所:大阪市立豊新小学校 参加者合計:約275名</td></tr> </tbody> </table>	日程	令和元年11月13日	参加者数	約100名	場所	大阪市立本田小学校			備考	日程:令和2年1月17日、参加者数:約85名、場所:大阪市立南百済小学校 日程:令和2年1月29日、参加者数:約90名、場所:大阪市立豊新小学校 参加者合計:約275名		
日程	令和元年11月13日	参加者数	約100名											
場所	大阪市立本田小学校													
備考	日程:令和2年1月17日、参加者数:約85名、場所:大阪市立南百済小学校 日程:令和2年1月29日、参加者数:約90名、場所:大阪市立豊新小学校 参加者合計:約275名													